

「笑顔」の力

県立千葉南高等学校校長 和田 潤子^{わだ じゅんこ}

教職に就いた頃には、管理職として学校経営について考えるなどということが、自分の人生に訪れるとは全く予想していなかった。

バブル期真っ只中に、某大手企業の内定を断って教員になるという私の判断に周囲は「本気か？」と呆れていた。男女雇用機会均等法が施行されたとはいえ、民間企業の空気はまだ違うことを感じる場面は多かった。私が教員という仕事を選んだのは、性別に関係なく、ずっと続けられる仕事がしたいと考えたことが大きい。自分の好きな国語と弓道に携わっていけるというのも、もちろんあった。ただ、崇高な使命感等とは程遠かったことをここに告白しておく。

仕事が始まると、日々の忙しさと理想も希望も吹っ飛んでしまう。うまくいかないことだらけだが、落ち込んでいる暇さえない。悔し涙もさんざん流したし、「もう、辞める！」と思ったことも一度や二度ではない。とにかく目の前の1日を乗り切ることに必死だった。こんな私が、教員としてここまで何とか仕事を続けてこられたのは、厳しく温かく指導してくださった先輩方、支えてくれた仲間、家族、そして何より生徒たちのおかげだ。様々な出会いに恵まれて現在がある。本当に感謝しかない。

そんな日々の中で感じていたのは、こちらが「教える」ことよりも生徒たちから「学ばせてもらう」ことのほうがはるかに多いということだ。自分は本当に何もわかっていないということをいつも思い知らされる。自分自身と向き合って努力を重ねていくしかない。苦しいし辛い。でも、学び続けることは喜び

でもある。謙虚さと向上心は常に持ち続けていたいと思っている。

教職の魅力は、何よりも生徒たちと過ごす時間の素晴らしさにある。一緒に笑って、一緒に泣いて、大変なことはたくさんあったはずなのに、覚えているのは楽しかったことばかりだ。生徒たちと共有した貴重な時間は決して色褪せることはない。

今日まで、高校教諭、生徒指導専任指導主事、中学校の管理職、高校の管理職…と様々な角度から教育現場を考える機会をいただいた。多くの貴重な体験の中で、改めて心から思ったのは、教員にとって一番のご褒美は生徒の「笑顔」だということだ。タイパもコスパも最悪かもしれないが、こんなに素晴らしい宝物を日々受け取ることが出来る職業なんて他にはない。その「笑顔」を守るために私たち教員は毎日必死で働いている。

学校が安心・安全な居場所であること。生徒も教員ものびのびと笑顔で過ごせる場所であること。その環境を整えることは、管理職の重要な役割だ。社会はめまぐるしく変化を続けている。ICT活用の推進、高校入試の改革、新教育課程を踏まえた大学入試への対応、生成AIの取扱い等、取り組むべき課題は山積している。現場は多忙を極める。その中で、周囲の声をしっかりと聴き、共に考えていくことの大切さを痛感する。自校の良さをさらに伸ばすために、方向性を示し、教員一人ひとりがより良い学校づくりについて考え、語り合い、行動していける職場を全職員とともに目指していきたいと考えている。もちろん、私も笑顔を忘れずに。

働きがいのある職場環境づくりへの挑戦

銚子市立飯沼小学校教頭 ひらの 平野 せいいち 誠一



教頭として銚子市立飯沼小学校へ赴任して2年目。教頭として何ができたか、全職員に聞いてみた。自分の取組と職員からの評価を教頭のやりがいとしてまとめた。

(○印は校長、●印は職員からの評価)

1 地域との連携

教頭として、保護者との絆を大切にし、地域人材の活用に力を入れてきた。

○フットワークが軽い。

- 毎朝、地域をまわりながら、ごみを拾い、児童や保護者、地域住民と交流している。
- 毎日休まず、朝一番に学校に来て、校内点検や通学路点検をしている。
- 校外学習や社会科見学等、外部との連絡や交渉を率先して行っている。

2 人材育成

若年層の授業参観や生徒指導上の助言は、気が付いたらすぐに行うようにした。

○授業の充実（自身はもちろん、先生方へ適切にアドバイスしている。）

- 将来を担う若い先生方へ、優しい言葉かけや適切な指導方法を提供している。
- 教科や学級経営の指導力、助言力がある。
- 学校全体、職員の立場をよく考え、適切にアドバイスしている。
- どんなに忙しい時も、いつもこちらの話にきちんと耳を傾けてくれる。

3 風通しのよい職場環境づくり

教頭から率先して挨拶し、気になったことは校長や職員にすぐに伝えるようにした。

○校長への報告・連絡・相談が適切である。

○職員の相談に迅速かつ丁寧に対応している。

- 職員が行きたいと思う職員室の雰囲気を作っている。

- コミュニケーションを大切にして、一人一人の職員のことを理解している。
- 職員の体調や学級の様子を気にかけている。
- 何気ない相談を聞いたり、すぐに対応してくれたりする。

4 働きがいのある職場へ

○的確な仕事の割り振りができる。

- 縁の下での力持ち。
- 学校教育目標を達成するために校長の右腕となり働いている。
- 校長が不在のときも、学校で問題が起きたら対応してくれる。
- 新任者がなじみやすい環境をつくっている。
- 私たちが見通しをもって取り組みやすいように、環境を整えてくれている。（毎月の予定やレポート等の課題の締め切り）

5 おわりに

教頭の職務として、校長のビジョンのもと、未来を見越して学校経営を支えていかなければならないが、目の前の職務に追われてしまっている。しかし、力を入れたことを職員が評価してくれる。これが教頭のやりがいとを感じる。課題として

○ベテラン層への対応（職務上の上司として）

○人事評価第一次評価者として（校内の見回りとともに授業や職員の様子を確認）

- もう少し細かい点を共有して欲しいと感じる時がある。
- 授業改善についてのアドバイスがもっとほしい。
- 時間外の勤務が多いので、もっと休んでほしい。

課題は山積みである。この課題を解決していくこともまた、教頭のやりがいである。

教務主任の役割と未来への取組 ～働き方改革とデジタル化の推進～

大多喜町立大多喜小学校教諭 和山 孝行



1 はじめに

近年、教育現場でも働き方改革や校務DX（デジタルトランスフォーメーション）が進み、その中で教務主任の役割がますます重要となっていると感じる。従来は紙でのやり取りが主流であったが、クラウドツールの利用が進み、場所や時間を問わずに業務ができる環境が整いつつある。教務主任は、柔軟な働き方の導入を提案し、教職員が最適な環境で働けるような仕組みを検討していかなくてはならないと考える。

2 教務主任としての取組

(1)タスク管理

Microsoft Planner（以下、Microsoft 省略）を活用することで、プロジェクトの各タスクを分類し、担当者を割り当てることができる。これにより、誰が何を担当しているのかを明確にし、学校全体でタスクを効率的に管理することができる。

また、提出物の締切りを割り当てて知らせることで、教職員は自分で締切りを設定する手間を省くことができる。これにより、教職員は時間を節約し、他の業務に集中することができるようになった（図1）。



図1 Teamsに追加した担当者別タスク管理画面

(2)予定の共有

これまでその日の予定を職員室のホワイトボードに手書きしていたが、職員室以外では確認ができないという不便さを感じていた。そこで、SharePointを活用し、インターネットに接続された任意の場所からアクセスすることができるようにした。そのため、教職員が教室や自宅など職員室以外の場所においても、共有された予定表をリアルタイムに確認することができるようになった（図2）。



図2 Teamsに追加したSharePointページ

(3)その他の取組

- ・遅刻、欠席連絡のデジタル化
- ・校務のペーパーレス化、クラウド化 など

※以下のURLや二次元コードから、導入方法や実践例をご覧ください。

https://note.com/takayuki_wayama



3 おわりに

未来の教育に備え、大きな変化に対応することで、教務主任の仕事がより意義深くなるのではないかと考える。柔軟性と新しい技術への適応力をもちながら、学校の発展に寄与すること、先生方にとって働きやすい環境を整えていくことが教務主任の大きな役割であり、やりがいであると考えている。

教職のやりがい ～主幹教諭として～

柏市立柏第五小学校主幹教諭 すずき りょういち 鈴木 亮一



1 はじめに

私は昨年度より気持ちも新たに主幹教諭となり、4年生の担任を受け持つこととなった。教員生活も15年目を迎え、発展期から充実期の時期に来ている。そのような状況の中、主幹教諭として特に、若年層教員に向けて教職の魅力を伝えていきたいと考えている。

2 若年層教員の育成

昨年度も今年度も、初任の教員が自分の学年にいるため、学習指導や生徒指導面でのアドバイスはできるだけ具体的にすることで、伝わりやすいよう工夫した。教職1年目は、学習指導だけでなく、生徒指導や保護者対応などで多忙感を感じやすい。そこで、私自身が初任者だった時の気持ちを思い出しながらかつて接することで、より寄り添った指導ができると考えた。どのような不安があったか、どのように指導されたら理解ができ、モチベーションが上がったかを振り返りながら指導していくことは、私自身の資質向上にもつながったと考えている。

3 風通しの良い職場づくり

質の良い教育を行うためには、教職員同士のより良い人間関係が何より大切であると考えている。

教職現場では、年齢も経験年数も違う教職員が共に学校教育目標に向け、同じ方向を向いていかなければならない。そこで重要となることは、些細なことでも相談することができ、共に笑い合える関係である。そのような関係をつくる手助けをすることも主幹教諭と

しての使命である。

そこで、教職員の円滑なコミュニケーションを促進する目的として、「クレープ作り体験」を企画した。そこでは、ベテランや中堅、若年教員等が好きな具材を入れ、クレープを食べながら、笑顔でコミュニケーションを図る姿が見られた。このように楽しそうに交流を図る姿を見ることは、改めて嬉しいものだと感じた。

4 学校運営・校長・教頭の補佐

「主幹教諭は、校長及び教頭を助け、命を受けて校務の一部を整理し、並びに児童の教育をつかさどる。」と学校教育法にある。私自身、担任を受け持っているため、学校全体の教育課程を担当している教務主任と連携をしながら教育課程の編成を進めてきた。また、主幹教諭は管理職と教職員とのパイプ役でもある。教職員の現在の状況把握に努め、積極的に声をかけて相談に乗ったり、変化があれば管理職に伝えたりしながら、風通しの良い職場環境を目指してきた。

5 おわりに

主幹教諭としての職務を常に意識し、自覚しながら実践を進めてきた。振り返ると、自分の学級の児童だけしか考えていなかった教職1年目から、全教職員や全校児童、保護者や地域全体について考えるようになった。その中で、教職員が生き生きと働き、笑顔で学ぶ児童の姿がそこにある、そのことが、今の私にとっての何よりの教職のやりがいであると感じている。

子供たちの「できた喜び」、「成長」、「笑顔」のために

酒々井町立酒々井小学校教諭 かやの 茅野 ひでゆき 英行



1 はじめに

私は本校に赴任して3年目になる。教員経験は13年目を迎え、昨年度から自閉症・情緒障害特別支援学級の担任及び研究主任として職務にあたっている。本稿では、特別支援学級の担任としてのやりがいや研究主任としての取組について紹介する。

2 特別支援学級の担任を希望した理由

私は11年間、通常の学級の担任として子供たちの素直な心や優しさに触れながら学級経営に取り組んできた。しかし、新たに自分自身が成長していくために、今までの経験を生かして、以前から関心のあった少人数で様々な可能性を秘めている子供たちの指導に取り組んでみたいと強く感じ、現在、特別支援学級の担任をさせていただいている。

3 特別支援学級の担任としてのやりがい

担任としてのやりがいは、先生方と協力しながら子供たちの活動場面を多く取り入れた支援について検討を重ね、実践できた時である。そして、実践を通して、子供たちが「できた喜び」を実感し、「笑顔」になった表情を見ると、やりがいと同時に教員としての喜びを感じる。

4 特別支援学級の授業実践

授業の実践については、個別の指導計画を基に自立活動の項目を取り上げて、各教科の内容や活動と関連させながら進めている。また、得意なことを生かしながら苦手なことについて克服できるような学習の場を設定し、子供たちの明日の成長につながるよう努めている。加えて、交流学級担任と情報共有しながら子供たちの支援にあたっている。

5 研究主任としての取組

本校の研究教科は算数科である。研究主題は「自分の思いや考えを伝えることのできる児童の育成～算数科における基礎基本の定着と表現力の向上を目指して～」と設定している。これまでの授業で課題としてあげられることは、限られた子供の発言や活動が多く、全体で思考を深める展開までには至っていないことである。そこで問題解決のための見通しをもち、自力解決に取り組んだ後、少人数によるグループ活動（ICTの活用を含む）を展開して、すべての子供が自分の考えを発表したり、相手の考えを聞くようにしたりしている。この取組により、教え合いや学び合いが広がり、主体的な学習が進み、研究主題に迫ることができるものとする。今後も学校全体でこの実践に取り組み、子供のもっている素直な発言、反応、考えを大切にしながら「できた喜び」を分かち合える授業展開に努めていきたい。

6 おわりに

特別支援学級の担任として、今後もきめ細やかな指導・支援を実践し、子供たちがたくさんの成功体験を味わえるような機会をつくり、自立と社会参加へ繋がる懸け橋となれるように関わっていきたい。

また研究主任としては、子供たちから「先生の授業は楽しい」「できないことができるようになった」という声が多く寄せられる授業を展開するため、教材研究に励み、学校全体へ発信していきたい。

今後も子供たちの人生を預かるという自覚と責任を持ち、一人一人の個性を大切にしながら関わり続け、「できた喜び」を一緒に共有できるような存在でありたいと思う。

共感と共考

県立千葉特別支援学校教諭 そのはら 園原 たろう 太郎



「先生、今日も鬼ごっこをやりましょう。」
「△△先生、〇〇さんはどうして授業中立ち上がっているのでしょうか。悩んでいます。」
「〇〇さんがトイレで初めて成功しました。」

これらのやりとりは特別支援学校でよく見られる内容である。私はここに特別支援学校の魅力があると考えます。昨今、特別支援学校に限らず教職を目指す人が減少していると言われている。現場で働く私たちにとっては悲しい現状である。今一度、特別支援学校で働く意義や魅力について考えてみたい。

【子供たちとの共感】

私には忘れられない出来事が2つある。1つ目は、運動が苦手なAさんとの出会いである。学習集団の中でAさんだけが平均台を渡れず、いつも泣いて悔しがっていた。毎日練習して、ようやく1m渡ることができた。よほど嬉しかったのか、私に抱き着いて「やればできるね。」と言って喜んでくれた。「できた。」という喜びを「やったね。」とAさんと共感できた瞬間であった。2つ目は、話好きのBさんと発語がないCさんとのやりとりである。ある日、Bさんが「Cさんはどうしてお話できないの。」と聞いてきた。私が「どうしてだと思っ。」と質問すると「分からない。」と答えた。私はあえて「そうだよね。また気になることがあったら教えてね。」と伝えた。数日後、Bさんが興奮して「Cさんが、『うー』って言いながら僕の手を引っ張って、絵本を取った。」と訴えてきた。Bさんが落ち着いたときに、その場面の振り返りを行った。するとBさんは「僕の絵本を貸してほしかったのかな。」とつぶやき、その後はCさんの要求に

「どうぞ。」と言って絵本を渡し、応えていた。そして「僕分かったよ。Cさんは手と声で教えてくれるね。」と得意気に言っていた。Cさんという友達を受け入れ、そのことをBさんと一緒に共感できた瞬間であった。

【同僚との共考】

特別支援学校には、多種多様の課題を抱えた子供たちが在籍している。日々、指導・支援方法を悩みながら過ごすことも少なくない。しかし、特別支援学校は複数の教師で指導・支援にあたることが多いため、相談できる環境がある。一人で抱え込まずに、相談しながら指導・支援を行うことができることは、教師の精神的不安を減らすだけでなく、子供たちの成長に繋がると考える。「教育に正解はない」という言葉があるように、同僚と一緒に子供たちのことを話し合いながら考え、成果が見られたら喜び、成果が見られなかったら、再考すればよいのである。「私はこう考えるけど、〇〇先生の意見も大切だよね。」とベストな答えを出すのではなく、その時にでき得るベターな指導・支援方法を見つけていく過程に魅力がある。

以上が私の考える特別支援学校で働く2つの魅力である。教師になって19年であるが、子供たちとたくさんの共感をし、同僚と様々な角度から共考してきた。悩むこともあったが、子供たちの笑顔や言動で救われたり、同僚の助言でモチベーションを高めたりすることができた。今後も目の前の子供たちや同僚と一緒に学校生活を送り、共感と共考を繰り返しながら、子供たちの成長を見守っていく所存である。

子供の「やりたい!」「やってみたい!」を目指して

香取市立山田小学校教諭 森 達也



1 教師を目指したきっかけ

「じゃあ、やってみる?」

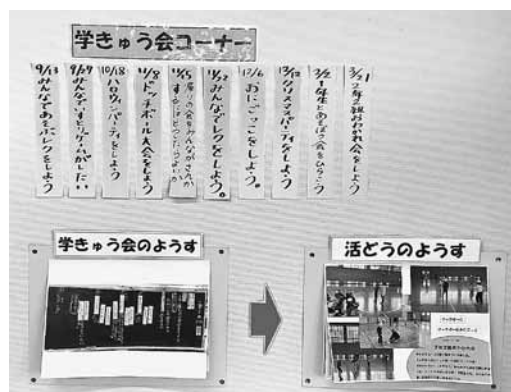
私が教師を目指すきっかけになったのは、小学校の時の担任から言われた言葉だ。学級通信を自分で書いてみたいと思い、担任に伝えてみると、「いいよ、やってみよう。」と言われた。それ以来、自分が認められた気がして、学級通信はもちろん、様々な場面でいろいろアイディアを出すようになった。自分が提案した企画で活動ができることは楽しく、友達が喜んで参加する姿を見て嬉しかったことを覚えている。もちろん、学校生活はとても楽しいものになった。このことがきっかけとなり、子供たちが何かに自信をもったり、得意なことをみつけたりする手助けをしたいと考え、教師を目指すようになった。

学校生活は、「〇〇してみたい。」「〇〇やってみたい。」と子供たちが自分たちで楽しくしていくものだと思う。そのために、いかに教師が動くかが大切なのではないかと常日頃から考えている。やらせるのではなく、自分から「やりたい!」と言えるようにするために、どう手立てを打てばよいのかを考え、これまで指導してきた。

2 学級会での実践

子供の「やってみたい。」を実現するために考えたのは、学級会の話し合い活動を充実させ、自分の意見を積極的に伝えられるようにするということだ。自分の「やってみたい。」という思いを自信をもって伝え、主体的に活動できるようにするためには、学級会での話し合い活動の経験を重ねることは大変重要である。さらに、話し合いの中で人間関係が構築され、学級のよりよい雰囲気づくりも期待でき

る。初めは話し合いに参加する子供も数人だったが、回数を重ねるごとに、しだいに意見を伝えられるように子供たちが成長してきた。さらに、自分がやりたいことだけでなく、「友達全員が楽しい気持ちになるか。」を意識して意見を言えるまでになった。低学年の子供たちでも、相手を意識し、思いやりをもって関わり合えることに感心した。また、学級会や日頃の活動の様子を掲示したことで、自分自身が成長できたことの喜びを感じ、子供たちがより積極的になっていったと感じる。



教室に掲示した学級会や活動の記録

3 教師のやりがい

教職の仕事に就いて4年目の今でも、子供から「授業が楽しかった。」という言葉を引き出すことはとても難しいものだと感じる。それでも、その一言のためにたくさん準備し、子供のことを考えている時間はとても有意義なものだと私は感じる。それは、教師が、子供の可能性を開花させる手助けができる特別な仕事だからだ。「できた!」「わかった!」「やってみたい!」の言葉と笑顔あふれる子供の姿には、他の何にも代えられないやりがいがある。これからも、大切な子供たちのために精進していく。

AIにはできないであろう職業、教員

市原市立姉崎東中学校教諭 たけした 竹下 さや 沙耶



1 はじめに

私が教職を目指そうと決意したのは、高校での進路選択の時であった。自分自身にとって身近な職業を考えた時、いつもそばにいて支えてくれていたのは、「先生」だったと気付いた。小学校、中学校、高校、大学を振り返ってみても、今まで出会った先生方のおかげで様々な経験ができ、成長することができたと思っている。どの先生方も生徒だった私と真剣に向き合ってくださった。そのような先生方のように、一人一人と向き合える教員になりたいと思った。

2 教職の魅力

(1) 生徒との関わり

教職の一番の魅力は、生徒を傍らで支え、その成長を感じられることだと思う。昨年度から学級担任として生徒と過ごしている中で、自分たちの学級がより過ごしやすくなるようにそれぞれが考えたり、話し合ったりする姿を見ることができた。どの生徒も初めは自分の意見をうまく伝えることができずに、自信をなくしていることもあった。しかし、生徒と向き合い、一緒に考えることで、考えがまとまり、自信に繋がっていたように見えた。また、様々な役割にもチャレンジすることを薦めた。リーダーシップがとれる生徒に対して、リーダーを支える側の立場を経験してもらったり、今まで班長を経験したことがない生徒にやってもらったりと、多くの生徒にいろいろなことをチャレンジしてもらった。そのチャレンジを経て、自分に向いていることや自分にとって難しいことは何かを気

付くことができる生徒が増えた。その気付きから、次は自分に何ができるのか、どのようなことをしたら良いのかまで考え、みんなの為に行動できる生徒が増えてきたと感じる。このように、生徒が自分自身のことを自分で気付くことができたことは、大きな成長だと思う。

(2) 経験が自信に繋がる

教員の業務は、学習指導や生徒指導だけではなく、様々な校務分掌にも取り組む。私が担当した校務分掌は、出席簿や視聴覚関係であった。特に視聴覚関係は、生徒や先生方のタブレットに関する重要な役割であったと思う。近年、ICTを活用した授業が行われているが、タブレットや電子黒板等をもっと有効に活用した授業が展開できないかと悩む時もあった。しかし、先生方との情報交換や研修の中で、様々な活用方法を学ぶことができ、授業にも活用することができた。電子機器に詳しくなかった私も、校務分掌を通して学ぶことができ、また、活用できるようになって自分の自信に繋がった。大変な役割でもあったが、経験ができて良かったと思う。

3 おわりに

ニュースやSNSでは、教員の多忙感や責任感について話されている。そのため教員を目指す人が減少している。しかし、未来を担う生徒の人生に身近であり、影響力も強い存在である教員をAIには代えられないと思う。嬉しいことや悲しいこと、悩んだことを一緒に共有し合えるのは人間の特権だと思うからだ。

楽しく前向きに取り組める授業を目指して

鴨川市立天津小湊小学校教諭 ^{いしい}石井 ^{ゆか}佑佳



1 ことばの教室の担当になって

ことばの教室の担当となってから3年目となった。現在28名の児童を担当しており、本校での指導の他に2校を巡回指導している。それまでは学級担任をしており、ことばの教室でどんな学習をしているのか分からず、不安な気持ちが大きかった。そこで、まずは前担当者の指導方法を真似することから始めた。

ことばの教室に通う児童の課題は、音の置換、歪み、混同、吃音、緘黙等様々である。担当になり1年目の時、[カ]行が[タ]行に置換する1年生の児童がいた。[カ]音を導くために「水なしうがい→『カー』と音を出す」といった練習を行っていたが、発音の一手手前の所で、中々うまくいかずに苦戦していた。うまくいかなくても頑張りを認める声かけを続けたり、家庭にも協力を得て練習に取り組んでもらったりした結果、ある日の練習で突然[カ]音が出せるようになった。「今の音が[カ]の音だよ！言えた！」と、自分のことのように嬉しかったのを覚えている。担任にも報告をして褒めてもらい、その児童も満足げな表情をしていた。それまでは指導方法が児童に合っているのか分からず悩んでいたが、その経験から練習方法を一緒に探っていけばよいと思うようになった。本来、自然と身につく発音も、こつこつと練習をして言えるようになった児童にしか味わえない喜びがある。また、ことばの教室の担当だからこそ、その喜びを共有できると感じている。

2 授業で心がけていること

授業では「児童との関係づくり」「楽しく

前向きに練習すること」を特に意識して取り組んでいる。まず、児童との関係づくりのために授業のはじめに数分の「お話タイム」を設けている。学校や家庭での楽しかったこと以外に、時には、困っていることや悩んでいることを話すこともある。児童の話にじっくりと耳を傾けることを心がけている。

ことばの教室では、児童自身にとっては苦手なことを練習しているため、楽しく前向きに取り組むことができる授業を心がけている。例えば、10回練習するごとに色塗りやおはじきを置いて頑張りが目に見えてわかるようにする、3回練習したらサイコロを振る等、遊びの要素も取り入れて練習をしている。また、教材を児童と一緒に作成することもあった。児童の好きな動物をモチーフにして、アイテム集めをする教材と一緒に作成し、練習をしながら楽しく活動した。児童自身が作成したことで、意欲的に取り組む様子がみられた。

3 通級指導のよさ

通級指導は、個々に合わせた進度や内容で学習をすることができる。学級で落ち着かない児童も、個別指導では集中して取り組むなど、普段とは違った態度や表情をみせることもあり、新たな一面に気づくことがある。個々に合わせた学習を考えるのに悩むこともあるが、一方で、言語指導は教科書がないからこそ、自分で授業をつくりあげる楽しさがある。「ことばの教室が楽しみ」と言ってくれる児童のために、今後も一人一人と向き合い、楽しく前向きに取り組める授業づくりをしたい。

幼児とともにつくる保育

浦安市立舞浜認定こども園教諭 片山 遥



1 はじめに

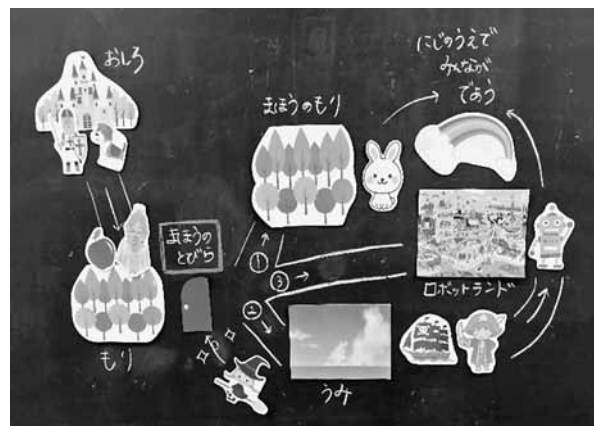
幼稚園教育要領では、幼児の発達に即した主体的・対話的で深い学びの視点から幼児の遊びを捉え、指導に生かすことが示されている。ここでは、昨年度に担任をしていた年長学級（5歳児）の表現発表会に向けた取組を紹介する。

2 年長表現発表会に向けた取組

10月上旬に運動会を終え、学級のみんなで力を合わせる楽しさや、やり遂げたことへの満足感を味わっていた頃、表現発表会に向けた最初の活動として、内容や題材、なっていたものなどを自由に出し合う機会を設けた。その中にはストーリーに一貫性がなかったり、自分たちの力で実現するには難しいアイデアが含まれたりしていたが、あえて方向性を一つに決めるようなことはせず、どのようなアイデアでも肯定的に受け止め、安心感や意欲をもって主体的に取り組む楽しさを味わうことを大切にしたい。

学級での話合いを何度も重ねていく中で、お姫様、剣士、魔法使い、海賊、犬、うさぎ、ロボットが出てくる創作劇をすることになった。そこで、色々な種類の絵本の読み聞かせを通してイメージを広げたり、4～5人のグループでアイデアを出し合ったりと、実態や活動に応じて環境の工夫を行った。すると次第に「ここに魔法の扉があるってことにして…」「夢の世界では、動物たちやロボットもお話ができるっていうのはどう?」「剣士がお姫様を探すには、仲間が必要だよ!」「最後はどうやってみんなが会えることにする?」と

持ち前の空想力を生かして物語作りを楽しむようになっていった。また、個々のアイデアを一枚の絵にまとめ、登場人物はペーパサートにして掲示をすることで、自分たちで登場人物を動かしながら物語の展開を確認したり、辻褄が合わない箇所は修正しようとしたりする姿も見られるようになった。



みんなのアイデア（ストーリー）を図にまとめたもの

物語の大筋が決まってからは、話の流れに合わせて自分なりの動きをつけたり、台詞となる言葉を考えたりしながら劇としての表現活動を楽しんだ。また、劇中に必要な大道具や小道具は、役の友達と相談しながら協力したり、個々のイメージを膨らませ、絵に描いたりしながら、自分たちなりのこだわりをもってつくり上げる姿が見られた。

3 おわりに

同じ学年の同時期であっても、当然、その年によって幼児の実態は異なる。幼児と同じ目線に立ってともに保育をつくり、その過程を一緒になって楽しめることこそが、教職の魅力なのではないかと感じている。

「給食があるから学校生活が楽しい」を目指して

習志野市立大久保東小学校栄養教諭 うえだ 植田 あつこ 敦子



1 はじめに

本校は、令和4年度からの2年間、地域における食育指導推進事業の指定を受け、「学校給食と教育活動を深く関連付け、児童の学校生活をより充実したものにするための食育指導の工夫」をテーマに、様々な取組を行ってきた。このテーマは、私が学校に勤めることになってからずっと心に決め思い描いているもので、栄養職員・栄養教諭の立場からできることや可能性を模索しながら進めているテーマである。今回は、令和5年度に行った取組の一部を紹介したい。

2 給食委員会の児童と目標を共有する

給食委員会の活動を通して、食べ物や食べることに興味・関心をもつ児童を増やし、食事を楽しむ心豊かな学校を作ろうとする力を育てたいと考えた。そこで、児童に給食委員会のグランドデザインを示し、「大久保東小学校の給食を、より楽しくより盛り上げるためにできることは何だろう」と問いかけ、給食から発信できる取組を、児童と共に考えた。活動を通して、「給食が楽しいから学校に行きたい」「給食があるから学校生活が楽しい」とみんなに思ってもらえると嬉しい、という思いと、それを実現させるために、同じ目標で一緒に活動していきたいということも児童に伝えた。

3 給食総選挙を盛り上げよう！

年間計画で、1月に給食総選挙を行うことが決まった。児童の発案で、食べ物の党を立ち上げ、それぞれの党の候補者に投票する方

法で行うことになった。給食総選挙を盛り上げるには、全校のみんなが投票したいと思えるような宣伝が必要になる。そこで、候補者のキャッチフレーズを考え、ポスターを作成することにした。



上：各党候補者（料理）のポスター

下：給食総選挙の結果

党	候補者	票数	党	候補者	票数
パン党	きなこ揚げパン	110	お肉党	からあげ	126
	ココア揚げパン	104		コーンフレーク焼き	87
	ガーリックトースト	43		照り焼きハンバーグ	45
カレー党	チキンカレー	166	デザート党	炭酸フルーツボンチ	195
	ポークカレー	68		ヨーグルト	39
	ドライカレー	28		ゼリー	20

※無効票あり（全校の61.6%の人が投票に参加）

児童は、例えば「お肉党」のコーンフレーク焼き（候補者）ならば「自分にごほうびカリカリ食感!」、「デザート党」のゼリー（候補者）ならば「ゼリーにときめきを閉じこめました」など、その料理の特長をつかみ、食品の栄養素を調べながら発想豊かにキャッチフレーズを考えた。ポスターの宣伝効果も上がり、給食総選挙は全校児童が関わる自治活動として期待以上の成果を上げることができた。

4 おわりに

学校には毎日給食があり、私たちはその給食を学校教育活動に最大限に活かすことができる。これは、とても魅力のある仕事ではないかと思う。これからも、児童との関わりを深め、「給食があるから学校に行きたい」「給食があるから学校生活が楽しい」と思ってもらえるよう、共に考え取り組んでいきたい。

養護教諭の魅力

長生村立八積小学校養護教諭 まえはし 前橋 さや 沙耶



1 はじめに

養護教諭として勤めて、講師経験も含め本年度で10年目になる。地元の長生地区での講師経験を経て、山武地区で採用になり2校経験させていただいた。現在の八積小学校に異動して2年目となる。長生と山武は、隣あった地区だが、健康診断の実施方法などにこんなにも違いがあるのかと驚いた。前任校では、ちょうど新型コロナウイルス感染症が新たな感染症として広がった時で、まだ誰もが分からない未知のウイルスをどのように予防し、対策すべきか悩むことが多くあった。それでも、同僚や同じ地区の先生と対応を考え対処してきた。そのような経験を積み、今の実践につながっていることを実感している。

2 養護教諭の魅力とやりがい

(1)いろいろな表情をみせてくれる子供

養護教諭の魅力として真っ先に思い浮かんだのは子供たちの笑顔だ。「先生！もう痛くありません」「昨日はありがとうございました」「この間の傷、だいぶ治ってきました」子供たちからのうれしい報告とお礼の言葉。そしてニコニコ笑顔。私が養護教諭として「良かったな」と思う瞬間だ。しかし、いつも子供たちの笑顔が見られるわけではない。ただ泣きながら保健室に来室する児童や「教室に行きたくない」と訴える児童。家庭の問題を抱える児童。保健室を頼ってきてくれた思いに、そっと寄り添い、話を聞く。話を聞いていただけなのに、「少し話せてスッキリしました」「また聞いてください」と、保健室を後にする児童。その言葉と少し柔らかくなった表情

に、私が救われた気持ちになる。「先生暇そうだからきてあげたよ」「先生私怒ってるんだけど!」と、いろいろな話をしにくる児童。子供たちのいろいろな表情をみることができるのは、養護教諭だからだと思う。

(2)やりがいを感じる瞬間

養護教諭は心身の健康面から、全校児童と関わり経年的に成長を見守ることができる。これも養護教諭の魅力とやりがいの一つだと思う。健康診断等で成長を見守り、子供たちが悩みながらも日々頑張っている姿を身近で見ても感動をもらい、同じ時を過ごせることに幸せを感じる。また、児童が抱える様々な問題に、先生方や家庭と連携しながら、子供たちの「できた」「やれた」「乗り越えられた」瞬間を見た時、喜びを共有し合えた時、とてもうれしくなる。もちろん、うれしいことばかりではない。時には救急車を要請するような場面や、複雑な問題を抱える児童の対応に頭を悩ませる。自分の手当てや対応、言葉が、本当に正しかったのか悩む時もある。そんな時は、先生方に相談し、一人ではないとすることができる。そうして、たくさんの子供たちに「心身の健康面」から関わることができ、子供たちの笑顔や成長した姿に、「養護教諭になれてよかった」「養護教諭で良かった」と、大きなやりがいを感じるのだ。

3 おわりに

現在、養護教諭の仕事は多岐にわたる。保健室がどうあるべきか、子供たちのために今何ができるかを考えて、これからも養護教諭として頑張っていきたい。

チーム学校の一員として ～学校事務職員の魅力～

長柄町立長柄小学校主事 あきば 秋葉 ななみ 七海



1 はじめに

私は高校を卒業してすぐに学校事務職員として採用され、令和6年度で7年目となる。

高校時代の部活動で野球部マネージャーとして活動していたこともあり、子供たちや先生方が活躍する「学校」を支える仕事をしたいという思いから、学校事務職員を志望した。

2 学校で働くことができる行政職

行政職でありながら学校で働くことができるのは、学校事務職員だからこそその魅力である。

令和5年度まで勤務した九十九里小学校は、全校児童が約100人の小規模校だ。職員数も少ないため、学校にいる大人の一人として子供たちと直接関わる機会が多くあった。学校探検での案内用に似顔絵を書いてもらったり、外国語のインタビュー相手として子供たちと英語で会話したり、学校で働いているからこそ得られた体験がたくさんある。

子供たちの成長を間近に感じられることが、仕事への原動力となっている。子供たちが過ごす学校をより良い環境にしてあげたいという思いが、仕事に対する高いモチベーションを維持できる要因となっている。

3 学校運営への参画 ～業務改善～

学校現場の働き方改革が強く求められている中で、事務職員は学校組織における唯一の行政職であり、専門性を生かした学校運営への参画が求められている。

九十九里小学校に着任してからのテーマは、

「事務職員として学校のために（先生方や子供たちのために）何ができるか」だった。そこで、先生方が子供と向き合う時間を確保するための環境整備として、事務負担軽減を図ることを目標に掲げた。主な取組を2点挙げる。

(1)学校徴収金の支払方法について、現金からネットバンキングによる送金へ移行することで、管理の透明化及び担任による支払業務の軽減を行った。

(2)学校評価アンケートについて、Formsを使用したWeb回答を導入することで、担任や管理職の回収・集計業務の軽減を図った。

事務職員として業務改善を図ることで、先生方と子供たちの楽しく活動する時間を増やすことが、私のやりがいの一つである。

4 おわりに

私は地元である東上総地区に採用されたため、小中学生のときにお世話になった先生方と再会して一緒に働くことができた。また、初任校が事務職員2人配置の学校だったため、先輩と一緒に働きながらたくさんのかを学ぶことができた。

令和6年度からは休暇等補助という立場で様々な学校で働くことになるが、たくさんのかの出会いを大切にしながら、子供たちにより良い学びの場を提供するために、チーム学校の一員として学校運営に参画していきたい。そして、先輩たちがそうだったように後輩事務職員の手本となる存在を目指して精進していきたい。

子供たちの教育に携わる魅力について

健康福祉部児童家庭課・兼教育庁児童生徒安全課副主査 きみづか 君塚 えみ 恵美



1 学校教育現場での勤務について

私は児童福祉の専門職として千葉県に入職し、令和5年4月から学校現場等と児童福祉の人事交流の一環として、県内の小学校での勤務がスタートした。教育現場で私自身が行う業務は、拠点校での業務、近隣校での業務、緊急対応が必要な場合の業務に分けられている。昨年度は主として拠点校での授業の補助や児童との関わりを行うほか、担任教諭と保護者の面接に同席することや、家庭に対する不安や悩みを抱える児童との面接を行った。また学校内で、特に虐待事案や児童の問題行動に関する事案が発生した場合は、児童相談所をはじめ関係機関との連絡調整を行ったり、ケース会議に参加して家庭や児童の支援に関する助言を行ったりした。毎日が手探り状態であったが、校長先生をはじめ、先生方に支えられ、1年間を過ごすことができた。

2 教職員の魅力について

そのように全く新しい環境に身を置いて過ごした日々であったが、小学校での勤務は充実していたと実感している。それは児童が教職員との信頼関係の中で、自分のもっている力を最大限に伸ばしていこうとする姿をたくさん見ることができたからである。例えば、児童が登校して朝一番に教職員のところに行って宿題を頑張ったことを報告したり、授業の中で問題を解けるようになったとノートを見せたりした時に、教職員が「一生懸命頑張っているね。」「学習に前向きに取り組んでいてカッコいいよ。」等声を掛けることで、児童は教職員が頑張りをを見ていてくれるとい

う安心感をもって、さらに前向きに学習や学校生活に向かおうとする姿を見ることができた。学校行事では、教職員は高学年を中心に行事を主導できるように働きかけていた。また、高学年が低学年への関わり方で困っている時には、寄り添いながら支援していた。児童も役割や責任を自覚することで、生き生きと自分の仕事に取り組み、行事が成功した際は、充実感と達成感にあふれた表情を見せていた。児童から「先生、頑張ったらできるようになったよ。」という言葉の聞いたり、「大変だったけど、行事が成功してすごくうれしかった。」と話してくれたりした時は、児童の努力が実ったことや成長の喜びを共有できたことに大きなやりがいを感じた。

3 まとめにかえて

教職員は、児童に身近な立場で継続的に接する大人として、リスクのある児童や家庭の見守り、それに伴う関係機関との連携等、担う役割が非常に多岐に渡っている。そのため、日常的に児童に接することに大きな責任を感じることもあるのではないかと思う。しかし、先生方は日々児童のことを第一に考え、授業準備をしたり、行事の企画や準備をしたりし、毎日の学習指導、生活指導に取り組んでいる。学校生活の中で児童の表情を見てみると、その気持ちは児童にしっかりと伝わり、成長しよう、前に進もうとする推進力になっていると感じた。そのような関係性を築けることこそが、教職員の魅力であると実感しつつ、その一員として携われていることに大きな喜びを感じている。